

平成20年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 スケトウダラ

学名 *Theragra chalcogramma*

系群名 根室海峡

担当水研 北海道区水産研究所



生物学的特性

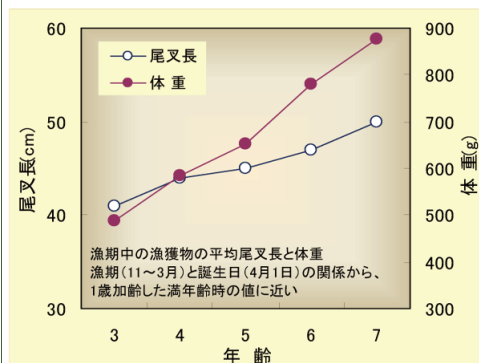
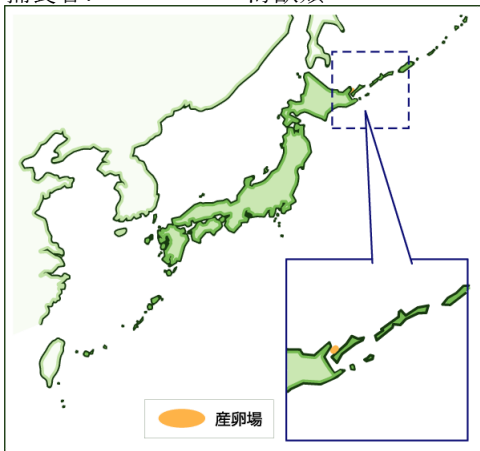
寿命: 10歳以上

成熟開始年齢: 3歳

産卵期・産卵場: 冬季(1~4月)、根室海峡

索餌期・索餌場: 産卵期以外は、オホーツク海と推測されるが未解明の部分が多い
食性: オキアミ類、カラマス類をはじめとする浮遊性小型甲殻類、本海域では、冬季に魚卵及び魚類を捕食している個体が多い

捕食者: 海獣類

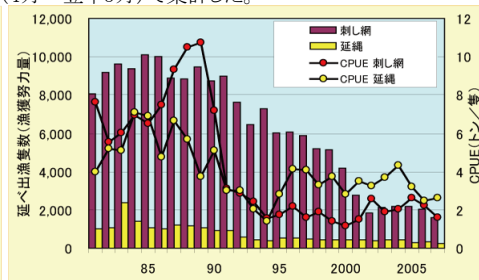
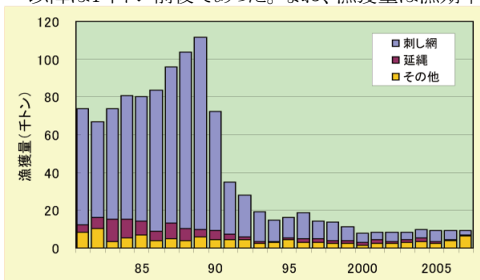


漁業の特徴

本海域のスケトウダラは、主として刺し網(スケトウダラ専業船)及び延縄によって漁獲される。操業期間は、延縄漁業が11~翌年1月、刺し網漁業(専業船)が1~3月である。漁獲対象は、産卵のために来遊した群である。刺し網漁業では2001年度よりブロック操業を導入し、操業の効率化を行っている。近年は、その他刺し網等による漁獲量が増加している。なお、根室海峡中間ラインより国後島側の海域では、ロシアの大型トロール船が操業を行うことがある。

漁獲の動向

漁獲量は、1989年度に過去最高の111千トンに達したのち急激に減少し、1994年度には15千トンまで落込み、その後も低迷を続け、2000年度には過去最低の8千トンとなった。2007年度の漁獲量は前年並みの9千トンであった。1986~1992年度には、ロシアのトロール船団が本海域周辺において15千~172千トンの漁獲をあげたが、2004年度以降は1千トン前後であった。なお、漁獲量は漁期年(4月~翌年3月)で集計した。



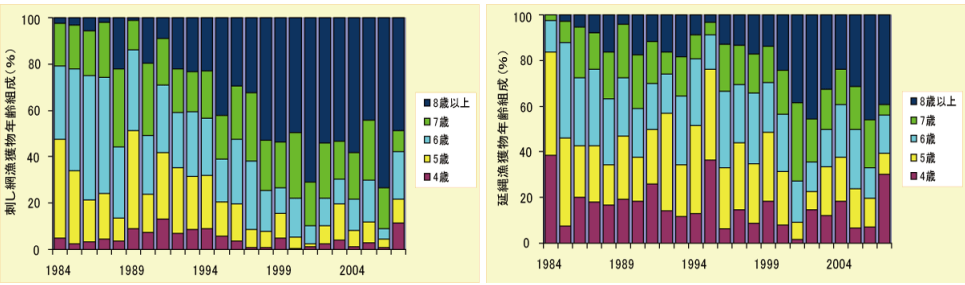
資源評価法

日本漁船による漁獲量とCPUEの情報はありますが、根室海峡中間ラインより国後島側の漁場では漁法の全く異なるトロール漁船による操業が行われており、この操業実態が不明のため資源解析は難しい。しかし、利用できる資料が他には無いため、ここでは、日本側の情報(日本漁船による漁獲量やCPUEの推移、漁獲物組成など)を基に、これまでに得られているロシア側の情報を考慮して資源状態を推定した。

資源状態

操業形態の変化などにより、刺し網漁業と延縄漁業の近年のCPUEをそのまゝ過去の値と比較することは困難であるが、漁獲量は1989年度のピーク時の1割を下回る低水準で低迷していることから、資源状態は悪いと推測される。また漁獲物年齢組成から、これまでの漁獲を支えていた8歳以上の高齢魚の漁獲尾数が減少傾向にある一方で、新規加入の4歳魚の加入量も増加していない。1981~2006年度までの漁獲量の変動範囲において、2007年度の9千トンは低水準である。また、過去5年間の漁獲量は、横ばい傾向を示しているが、主漁期のCPUEや漁獲量、漁獲物年齢組成などから動向は減少と判断した。





管理方策

本海域では、日本とロシア双方が主に冬季に来遊する産卵群を対象として漁業を行っている。日本側の主要な漁法は刺し網、延縄であるのに対して、ロシア側は大型トロール漁船による操業を行っているが、その操業実態は不明である。また、産卵群以外の若齢魚等の分布や漁獲実態も不明であり、当該資源全体の動向や水準を検討するために必要な情報は、日本側の漁獲情報を除くと限定的なものとならざるを得ず、資源量の推定や来遊予測は困難である。よって、当該資源についてはABCとしての算定は行わず、参考値として、資源の動向に合わせ漁獲を継続するCave5-yr、漁獲圧を低減し資源の減少を止める0.6Cave5-yrを算定漁獲量として提示することとすることとした。

漁獲シナリオ (管理基準)	F値 (Fcurrentとの 比較)	漁獲割合	将来漁獲量		評価	2009年算定 漁獲量
			5年後	5年平均		
漁獲圧を低減し、 資源減少を止める (0.6Cave5-yr)	—	—	—	—	—	5.6千トン
漁獲量の維持 (Cave5-yr)	—	—	—	—	—	9.3千トン

コメント

- 本評価群については、既存の情報からは資源量の算定が困難なことから、F値、漁獲割合、将来漁獲量の算定、定量的な評価は行っていない
- 本海域のスケトウダラは産卵回遊群を対象にした漁業であり、日ロ両国で行われている
- 日本水域における漁獲動向から、資源水準は低位と推測されることから、資源回復を図る必要がある
- 2005年級群の豊度が高い可能性があり、この年級が産卵親魚になる2009年までは未成魚保護の必要がある
- 中期的管理方針では「ロシア共和国連邦の水域と我が国の水域にまたがって分布し、同国漁船によっても採捕が行われていて我が国のみの管理では限界があることから、同国との協調した管理に向けて取り組みつつ、当面は資源を減少させないようすることを基本に、我が国水域への来遊量の年変動にも配慮しながら、管理を行うものとする。」とされている

資源評価のまとめ

- 操業形態や規模の変化により、刺し網や延縄のCPUEを資源量の指標値とみなせなくなっている
- 漁獲量はピーク時の1割以下で低迷しており、資源水準は低い
- 漁獲物年齢組成から、加入の悪化が示唆される
- 漁期全体の漁獲量は横ばい傾向を示すが、主漁期のCPUEや漁獲量の減少から、動向は減少と判断

管理方策のまとめ

- ABCの算定は行わず、参考値としての算定漁獲量の提示とした
- 資源の回復のためには、現在より漁獲水準を引き下げることが必要
- ロシア側の漁獲状況の情報収集が必要
- ロシア側もTACを設定して漁獲規制を実施している

資源評価は毎年更新されます。